

## ハイデガー・フォーラム第18回大会

### 応募要旨4

(自由テーマ)

## ポイエシスの哲学 ——西田幾多郎とハイデガー

周知の通り田辺元、九鬼周造、三木清、西谷啓治ら日本の哲学者たちはハイデガーのもとに留学し、その刺激から各自の思索を展開した。彼らの同僚や恩師などであった西田幾多郎の哲学も、直接の交流はなかったが、ハイデガーとの対決から形成されてきた側面をもち、従来の研究では両者の関係が跡づけられ、好んで論じられてきた。その一般的見解によれば、両者は互いを誤解する「すれちがい」に終わったが、西田の「場所」の哲学とハイデガーの「世界内存在」の哲学という自己をめぐる思索（その関連で「無」をめぐる思索）は親近性をもつとされる。それらの研究は、西田の『無の自覚的限定』（1932年）までの諸著作と、ハイデガーの『存在と時間』（1927年）や「形而上学とは何か」（1929年）を主な考察のテキストとしている。

ただし『哲学の根本問題続編（弁証法的世界）』（1934年）以降の後期西田の「ポイエシス」の哲学（現在の慣例の表記では「ポイエーシス」だが本発表では西田に従ってこう表記する）と、後期ハイデガーの技術論と芸術論もまた、親近性をもつものだと考えられる。

西田は「ポイエシス」をプラトン『饗宴』などを参照しつつ、自然・社会環境との関わりにおいて人間が、道具や芸術作品などの「物」から、社会制度などの「形」に至るまで、様々なものを産み出し作り出すことと規定する（例外的に、動物の器官の「自然」的生成もポイエシスとも言われる）。その思索は可能性を感じさせるものだが、その叙述はあまりに抽象度が高く、一般者・個物、形相・質料という形而上学的概念を用いた上で、さらに「絶対矛盾的自己同一」といった「弁証法」的な過度の「論理化」をなすことによって、その背後で考えられていた現象が見えにくくなっている。また敗戦の2ヶ月前にこの世を去り原子爆弾や戦後の大量生産消費社会を知らないこともあり、西田には現代技術に対する考察が乏しい。

これに対して周知のようにハイデガーは「技術への問い」（1953-1954年講演）で「ポイエシス」を、同じく『饗宴』を引用しつつ、存在者の「顕現 *Entbergen*」の一つのあり方として「出で—来—たらし *Her-vor-bringen*」と理解する。それは職人や芸術家の「制作」だけでなく「自然（ピュシス）」も含む。しかし現代技術はそうした「ポイエシス」を立て塞ぎ、物と人を徴用物資として徴発していく「総かり立て体制」であると

されている。また当の講演の末尾では、現代技術とは異なったポイエシスとしての「芸術」が触れられているが、それが論じられるのが、やや時代は遡るけれども「芸術作品の根源」（1935-1936年講演）であった。

本発表の目的は、このハイデガーの技術論や芸術論と比較することで、上述の西田の「ポイエシス」の哲学の本質と現代的意義を、西田の内在的研究よりも具体的・発展的に解釈することである。近年、このテーマに関しても研究はいくらかなされつつあるが、本発表では最近の発表者の研究も踏まえて改めて論じてみたい。そして、それが同時にハイデガー哲学を内在的研究とは異なった角度から照らし、その理解と継承に寄与することを期待したい。両者の突き合わせは、ハイデガーと東アジアの思索・芸術の関わりや、それを踏まえた上での現代技術世界のあり方を省察するために有意義だと思われる。

以下のような順序で進む予定である。

まずハイデガーの「四方界」の哲学と、西田の「表現」を根本概念とする世界存在論のあいだに、また「世界」と「大地」の「抗争」として「芸術」を捉えるハイデガーの芸術論と、西田の東洋芸術論のあいだには、事柄として親近性があることを説得的に論じてみたい。

しかし、そのような親近性を指摘できたとしても、ハイデガーはおそらく西田を批判するにちがいない。その批判は、上述のように西田が西洋形而上学の諸概念を用いて、また弁証法的にその思索を進めて行ったことに関わると言える。その意味を、ハイデガーが鈴木大拙や三宅剛一に対して語った、西田は「ヘーゲル」に似ており「西洋かぶれ」だという言葉や、「言葉についての対話」（1959年）における西洋形而上学の諸概念を用いた東アジア芸術の理解の危険性という洞察から解釈する。

他方でまた西田の側も後期ハイデガーに批判を向けるのではないかと考えられる。西田は『存在と時間』の「将来」優位の時間論に対して、存在者の先行的な理解や将来的な先駆に回収されない「事実」の経験や「汝（他者）」との邂逅という現象を基盤に、「現在」優位の時間論を構築していたが、そこから後期ハイデガーへの西田の批判を推察してみたい。

最後に、世界と実存の根底に有る西田の「絶対無」に根差した「ポイエシス」の哲学と、ハイデガーの「存在」の哲学の近さと遠さを踏まえた上で、両者の突き合わせがもたらす意義について総括的に考えることを、今の所予定している。